

書評

井上彰編著

『ロールズを読む』

(ナカニシヤ出版、2018年)

田中 将人

待望の、そして画期的な論集である。紙幅の都合上、以下では四点に限定して本書の特徴・魅力についての簡便なレビューを試みたい。

①政治的リベラリズム（後期ロールズ）の適切な理解：ロールズ研究史において、その前期と後期の関係性をめぐる評価は主要論点のひとつである。かつては単純な転向説が優勢だったが、今日の英米圏でこの解釈をとる有力な論者は皆無に等しい。だが、日本での後期ロールズ受容は不幸なものであり、一部を除き、ともすれば二十年前の理解の水準にとどまってしまっている。『政治的リベラリズム』が未邦訳であることもこの傾向に拍車をかけていよう。そうした中、宮本論文（3章）、田中論文（7章）、齋藤論文（8章）は、ロールズ内在的なテキストの精査はもとより、それぞれ、現代政治理論、法理学、政治思想史の知見を活用した有意義なものとなっている。政治的リベラリズムに関し、日本語でまず読まれるべき論考である。

②方法論の探究：『正義論』は、その実質的議論のみならず、無知のヴェールや反省的均衡といった方法論でも多大な影響を与えた。ただし、それは称賛と同時に批判をもよびおこし、今日でもなお議論的となっている。このトピックを正面から扱ったのが盛山論文（1章）と松元論文（2章）である。前者は経験科学、後者は科学哲学を補助線に用いて、多様な方法論上の論点を提示している。視角は異なるが、〈『正義論』は方法論を深化させたか？〉という問いへの両者の評価はある意味で対照的であり、あわせて読むと一層興味深い。また、若松論文（5章）は、合理性概念の読み直しをつうじて原初状態論の再解釈を試みる、刺激的な論文である。

③応用政治哲学のさらなる展開：規範理論に対しては、実効性のない理想論にすぎないとの批判がしばしば浴びせられる。ロールズは時にその領

袖とすら目される。だが、彼の著作では様々な分野の経験的・実証的研究も豊富に参照されており、一見抽象的に思われるその正当化論も、現実社会の一般的事実から離れるものではない。かかる実践的性格に着目し、規範的研究と実証的研究との協働をも視野に入れた上で、現実の諸問題への対応を目指す「応用政治哲学」という試みへの関心は、昨今とみに高まってきている。木山論文（4章）、加藤論文（9章）、額賀論文（11章）、角崎論文（12章）、井上論文（13章）は、この研究潮流に属する。各論文のテーマは、人権保障、社会的選択理論、生命倫理学、社会福祉、企業の社会的責任といった興味深いものであり、ここでロールズ理論はいわば道具箱として、適宜修正・批判された上で活用されている。これらは規範理論の有効性を示す論考といえるだろう。

④思想史的研究：ハーバードでのアーカイブ公開に伴い、近年ではロールズの思想史研究が登場してきている。佐藤論文（10章）は、まさにそうした研究も参照しつつ、F・ナイトがロールズに与えた影響に注目する。それは、アメリカ経済学という従来みえざる『正義論』の鉱脈を発掘すると同時に、この鉱脈自体の多様性を浮き彫りにする、思想史研究の醍醐味を伝えてくれる（なお、思想史研究の知見は松元論文でも有効に参照されている）。これに対し、小泉論文（6章）は、時に著者の価値観を表明するのを厭わず、自尊観念の来歴と変遷を丁寧に辿ったものだ。「生還者の自尊」なるタイトルからして、若きロールズの戦争体験に触れている点でもユニークである。

この水準の諸論考が日本語で読めることは、ロールズ理論に関心をもつ者にとって幸いとなるだろう。多彩な本作を読むことは、よく出来たコンプレッション・アルバムを聴くような感覚を思い起こさせる。もっとも、個別の論点につき評者には様々な疑問が浮かんだりもした。しかしその多くは誤りではなく解釈の相違に関わるものだ。問いを惹起するのは本書の欠点というより魅力である。それはまた、編者をはじめとする執筆者たちの意図でもあるだろう。読者をして「ロールズを読む」ことに誘うという意味でも、本書は充分に成功している。